

(一) 研究の意図——現代とのかかわりで——

人間の素質と能力をどのようなものと理解するかは、今日の教育問題における主要な論点の一つである。よく知られていることく、一九七一年に出された中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」は、児童・生徒の間に存在する素質や能力の相違を強調し、各人の相異なる能力に即応した教育を授けるため、学校の多様化や教育方法の改善を推進するよう提案している。¹¹⁾そして、こうした能力主義教育が、実際には財界の求める人的能力開発、すなわち経済の高度な発展において指導的役割を演ずるハイタレント・マンパワーの育成と密接な関連を有することは、しばしば指摘されるとおりである。しかし、中教審答申に集約され、政府および財界によって支持された教育改革の構想に対して、野党をはじめ国民の各層からさまざまな疑問や批判がくわえられている。たとえば、日本教職員組合により設置された教育制度検討委員会は、一九七四年

の最終報告「日本の教育改革を求めて」に示されたように、中教審路線と原理的に対決し、能力主義による選別と序列化こそが、今日における教育荒廃の根源にほかならない、と糾弾する。同委員会によれば、こうした選別の教育に對置して、歴史的に形成された教育的価値として、「すべての子どもの可能性の全面的かつ個性的な発達をめざす」という理念を掲げることが必要なのである。¹²⁾

人的能力開発や能力主義教育は、現代資本主義の必然的な要求であり、それゆえこのような政策への批判の姿勢もまた、日本ばかりでなく、ヨーロッパの諸国においても、革新政党や民主体のなかに認められる。とくに最近のフランスでは、左翼連合による政権構想を作成する過程で、教育の分野での民主的革新の理念と方策が明確にされた。すなわち、一九七〇年に共産党の提案した「人民連合民主政府のための綱領」は、ドゴールとその後継者による教育政策を、「社会的不平等を増大させる機能として、

フランス近代思想における人間の素質と能力

永治日出雄

特殊研究 一

梅根悟監修
世界教育史研究会 編

世界教育史大系 10

フランス教育史 II

本巻の執筆分担一覧（アイウエオ順）

執筆者名	現職	執筆分担
佐藤英一郎	専修大学教授	第六章、第七章、第八章
志村鏡一	静岡大学教授	第五章
永治日出雄	愛知教育大学助教授	特殊研究一
原聡	岡山大学助教授	特殊研究二(2)
森田伸子	拓殖大学講師	特殊研究二(1)

性急な、かつ容赦ない選別によりエリート⁽³⁾を育て、大衆を簡略な教育に追いやる」ものと非難して、能力主義教育への反対を鮮明にした。ついで翌年九月に締結された社会党および共産党の「共同政府綱領」は選別の教育に対決して、改革の基本的原理を次のように明示している。「学校には、あらゆる社会的分離を除去し、あらゆる文化的不平等と闘いつつ、すべての人びとのうちに、可能なすべての能力を形成し発展させる、という目的があたえらる。学校は各人が学習を始めたり再開するための、そして生涯の中途で活動の領域を変更するための、あらゆる機会を提供するであろう。(中略) 社会的分離に対する闘争こそ、教育の優先的課題にはかならない。この闘争は断固たる緊急の措置とともに、長期にわたる努力を必要とする。」

「共同政府綱領」において提起された教育政策は、第二次大戦の前後に人民戦線内閣のもとで作成された改革計画、とくにかのランジュヴァン・ワロン・プランの継承と評価することができる。しかし、社会のすべての成員に肉体と精神の十全な発達を保障する教育制度の確立は、パリ・コミューンと空想的社会主義が構想した重要な提案に属していた。また、人びとの間の不平等は先天的なものではなく、環境と教育の産物である、との見解はフランス革命と啓蒙思想の主要な原理の一つであった。こうした個人の尊重と教育の重視は、近代の思想の誕生のとき、ルネッサンスの時代にまで、その源流をたどりうるのである。

しており、資本主義の発展と労働者階級の成長によってのみ現実的となる。そこにおける全面発達の理論は、ルネッサンスや啓蒙の時代に提示された教育の理念を基盤としつつ、より充実した内容とより複雑な構造をもっている。このような系譜からは、コンドルセの思想の考察で終わる本稿は、素質と能力の問題に關し試みられた、思想史研究の前半部分といえることができる。

(二) 中世の思想における人間の素質と能力

近代の思想が形成された時代、なかでもルネッサンスと啓蒙の世紀には、人間の素質と能力についても、中世とは異なった考えが芽生えていた。この新しい人間観および能力観は、近代の思想のいわば土台を構成し、社会的には封建領主や絶対君主への第三身分の闘争と密接な関連を有していた。しかし、人間の素質と能力について近代の思想が提示した見解は、キリスト教の教義との対比によってのみ、その本質と意義が明らかとなる。なぜなら、こうした見解は、中世の文化を支配したカトリック教会やスコラ哲学との対決を通じ発展し結実したものである⁽⁴⁾。

キリスト教の人間観の第一の特徴は、人類そのものを無力で悲惨な存在とみなすところにある。「聖書」によれば、無限の力をもつ神は、宇宙を創造し、人類に地上の生きものを統率する役割と力をあたえた。しかし、私たちの祖先アダムは、蛇と妻の誘惑

人間の素質は本質的には平等であり、環境と教育の改善により各人の能力を高めることは可能である——このような教育理論の形成を、ルネッサンスからフランス革命にいたる、近代思想の発展のなかに究明するのが、本稿の目的である。ここでは中世の思想との対峙と闘争のなかで、唯物論的な、あるいは合理主義的な人間観、教育決定論あるいは能力後天説ともいべき能力観がいかに構築されたか、を検討してみよう⁽⁵⁾。

論究の範囲をこれほど広く設定したことは、論文の対象を一定の人物あるいは時代に限定する思想研究の通例からして、粗笨との批判を免れないであろう。にもかかわらず、このような構成を試みたのは、西洋の教育思想を学ぶ研究者のひとりとして、自己の研究作業の現代的意義を明らかにしたい、と考えたためである。さらに言えば、かねて素質と能力の問題について筆者が抱いてきた仮説を確証する一助としたいからにはかならない。すなわち、以下に論述される素質決定論と教育決定論との対立、換言すれば、能力先天説と能力後天説との対立は、哲学における観念論と唯物論との対立にも類似して、さまざまな時代にいろいろな形態で現われる基本的な路線の対立ではないか、との仮説である。

なお、素質と能力の問題を扱うに当たって、多くの人びとはマルクスにより提唱された人間疎外の克服あるいは個人の全面的発達を想起するであろう。しかし、それらは機械制大工業を前提に欺かれて、禁断の果実を食べ、神の怒りにより樂園から追放された。このときから、人類はつねに労苦と悲慘を背負い、苦難の道を歩んでいる。こうした中世的な人間観の源として、『創世記』は人類の原罪を次のように述べる。

神は人に言われた。あなたが妻の言葉を聞いたので、そして食べるなど私に禁じられていた木の実を取って食べたので、あなたのために地は呪われる。あなたは生きていくかぎり、たえず苦勞して地から食べものを引きださなければならない。地はあなたに対して、いばらとあざみを産出し、あなたは野の草を食べることになる。そして、あなたは地から引きだされたのだから、最後には地に帰る⁽⁷⁾。

アダムの原罪は人間の本性と能力に重大な変化をもたらした。彼が神の懲罰を受けた瞬間から、人類のうちに霊と肉の激しい相剋が始まる、とキリスト教の教義は説明する。さまざまな肉体的な欲望や自己みずからへの執着が、このときから人びとの魂を燃え立たせ、享樂と退廃に走らせる、というのである。こうして中世的人間観のいま一つの特徴、すなわち肉体と感性への蔑視、現世的な幸福追求への非難が浮かびあがる。アウグスティヌス(Aurelius Augustinus, 三五四—四八〇)の著作『神の国』は、その代表的な表現であろう。

人類の祖先が神の命令に背くと、ただちに恩寵は取り消され、自分の裸体を恥じらうようになった。あわてて最初にいちじくの葉に手が触れたらしく、彼らはまたそれを取って陰部、つまり恥ずかしい肢体を隠した。人類の肢体は以前も同じであったが、前には恥ずかしいものではなかった。こうして彼らは自己のうちに不服従という肉の新しい動きを感じるようになる。この動きこそ、彼ら人間の不服従に対し、神が返礼としてあたえた刑罰であった。悪をするために自由を選び、神に奉仕するのを蔑んだので、魂は肉に対するこれまでの支配権を実際に剝奪された。(中略) かくして肉は精神に反抗し、要求を強める。これが生まれたときから私たちの内部で展開される闘争である。原罪がなされた瞬間に、人類のなかに死が芽生え、私たちの肢体と損なわれた本性のうちで、肉が反抗し、かつ勝利するのである。⁽⁸⁾

霊に対する肉の反逆によって、人類は真理の認識についても、頼りなく惨めな存在である。人間の認識能力に関するこうした理解こそ、キリスト教の人間観が有する第三の特徴と言いうるであろう。真理は神の造ったものであり、かつてアダムは十分にそれを知っていた。しかし、原罪を犯したあとは、もはやみずからの理性と感性だけで、人類は真理を認識することはできない。なぜなら、肉体的な欲望や自己への愛着が、つねに人びとを欺き、正

しい道から逸らせるためである。『聖書』のなかに書かれ、人間の心の底に刻まれた真理は、自己の放棄と神への信仰によってのみ把握できる、とアウグスティヌスも言う。

神は私たちに、なにを求め、なにを避けよ、と命じておられるのであろうか。そうした意志を知りたいと望むならば、神への怖れを抱くことがなによりも必要である。神への怖れは、自己が死すべき存在であり、自己の前に死が待ちうけているとの考えに、私たちを導くにちがいない。そして、あたかも身体を十字架に釘づけするかのごとく、このような怖れは私たちの傲慢な心を縛りつけるであろう。次に必要なのは、信仰によって従順になることである。書かれている意味がよく分かり、自分の悪徳が咎められていると感ずる場合も、また書かれている意味がよく分らず、自分のほうが賢くて、よい教えを示せると思う場合にも、けっして『聖書』に反論してはならない。むしろ私たちは、『聖書』に書かれているすべては、たとえ明確に表わされていないときでも、私たちが考えだすいかなる事柄よりも、はるかに立派で、正しいと考え、かつ信じなければいけない。⁽⁹⁾

それゆえ、人類は至高で全能である神に依存し、みずからは卑小で無力な存在にすぎない。しかし、キリスト教はこうした人類

に、より美しい容姿に、あるいはよりすぐれた体質に生まれつく、と断言してよいであろう。⁽¹⁰⁾

このような中世の人間観あるいは能力観において、とくに重要なのは人びとの精神的能力に本来的な不平等を認める点である。もしも彼らが有する差異や不平等が、身体的特徴や肉体的強弱だけにとどまり、真理の認識や道徳的実践での優劣にまでいたらないならば、現実の身分的秩序や階級的支配を神の定めた不平等に起因すると弁ずることは困難であろう。しかし、キリスト教の教義は、原罪を犯したアダムの子孫には、聡明な者と愚鈍な者、有徳な者と邪悪な者とが、必然的に生ずると力説する。こうした教えによれば、知性や徳性の生まれつき劣る人びとは、神によって選ばれたすぐれた人びとに指導され、統治されることを通してのみ、真の幸福に達しうる。『神学大全』は説いている。

人類の最初の状態において、なんらかの不平等、少なくとも性の不平等が存在したことは必然であろう。なぜなら、性の相違なしには、出産がありえないからである。年齢についても同様であって、不平等な状態でのみ、ある人びとが他の人びとから生まれ、また結ばれた人びとが実際に子どもをつくりえたのである。(中略) 身体という側面にあっても、同じく不平等がありえた。実際に人間の身体は、自然の法則を免れてはおらず、外的な要因から便宜と助けを受けている。というのは、人間の生命もまた食物によって維持されているのではない。したがって、大気の状態や星の位相が異なるのに応じて、ある人びとは他の人びとに比し、より強靱なからだ

生物を比較すれば、明らかである。(中略) 人びとの間においても、よりすぐれた構造をもつ身体が存在し、高い知能をもつ魂がこれと結合される。それゆえ、アリストテレスも「肉の繊細な人は恵まれた精神を有する」と述べた。第二の条件は知性が働くために必要な、下位の能力の如何である。すなわち、表象や思考や記憶においてすぐれた人びとは、知性においても恵まれている。¹⁰²

封建社会の動揺と第三身分の台頭を背景に新しい原理を求めて船出した近代の思想は、このような人間観および能力観と全面的に対決することとなった。カトリック教会の僧侶は、ながく中世において封建貴族や絶対君主の支配と利益を擁護する任務をひき受けていた。原罪のため人類はつねに悲惨で無力であるとの訴えは、苦役と貧困に苦しむ農民を瞞着する役割を果たし、人びとの精神的素質は本来的に不平等である、との教えは、民衆に対し権力者への信頼と服従を鼓吹する効果を有していた。そして、地上の権力を正当化した左記のパウロの言葉は、カトリック教会の発展と封建社会の推移のなかで、さまざまに敷衍され体系化されるとともに、近代の思想が攻撃する最大の目標となった。¹⁰³

すべての人は上に立つ権威に従うべきである。なぜなら、神に由来しない権威はなく、およそ存在する権威は神により

達させることが、精神的発達と道徳的向上を導く基礎となるのである。それゆえ、アダムの惨憺な姿を描く『創世記』とは対照的に、その著作においてラブレールは主人公の巨大な体軀と旺盛な食欲を讃美する。

気のよいグラングウジェが、人びとと酒を飲んだり、ふざけたりしていると、息子がこの世の光を受けるに当たって発した。すさまじい泣き声を聞いた。赤児は大声をあげて、「飲みたい! のみたい!」と求めたのである。そこで彼は言った。「Que grand tu es!」なるほど、おまえのちものはでっかいな! (補って述べれば、おまえの喉は、の義) これを聞いて、かたわらにいた人びとは、誕生にさいして父親の最初に口にした言葉であるからには、古代へブライ人を範として、この息子にまさしくガルガンチュアと命名すべきである、と語った。(中略) さて、毎日この子に乳を飲ませるために、ボーチーユとブルエモンからの牝牛、一万七、九一三頭が用意された。というのは、彼を養うために大変な量の乳が必要であるとわかり、国中をまわっても、十分なだけの乳母が集められなかったからである。¹⁰⁴

『ガルガンチュア物語』においてラブレールは、人びとの知能や性格が、教育のよしあしによっていかに異なったものになるか、を

立てられたからである。したがって、権威に逆らう者は神の定めた秩序に背くことになる。(中略) 役人たちは神の命令でその職務に携わっている。だから、どの役人に対しても、定められた義務は果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を、税を納めるべき人には税を納めなさい。そして、怖れるべき人には怖れ、敬うべき人には敬いなさい。¹⁰⁵

(三) ルネッサンスの思想における人間の素質と能力

(1) 人間の本性との関連で—ラブレールを通して— 中世的な権威と支配からの

解放を求めるルネッサンスの文化は、イタリアからしだいに各国へと拡がり、一六世紀にはフランスにおいても開花しはじめていた。ラブレール (François Rabelais, 一四九六—一五五三) は、このような文化の中心人物であり、新しい人間と新しい教育の創造を提起した最初のひとりであった。彼が造りだした巨人ガルガンチュアは、古い世界の秩序と束縛を打ち砕く、逞しい活力を有している。

キリスト教の人間観とは反対に、ラブレールは肉体と感性を尊重するよう説いている。彼によれば、人間にあたえられた多くの感覚や欲望は、それ自体として蔑むべきもの、答めるべきものではない。むしろ人びとの自然的欲望を充足させ、肉体的諸能力を発

描写した。そこではまず詰め込み主義の先生がひき出され、経典や古典語を中心とする教会風の学習が、子どもを暗愚にし、低劣にする様子が示される。しかし、ガルガンチュアを育てる若い教師ポークラートの試みを通して、ラブレールは新しい原理にもとづく新しい教育を提示した。それは子どもの精神を開発する土台として、肉体と感官の訓練を重視し、正しい判断や有益な技芸を習得する方途として、事物や経験に依拠する教育である。¹⁰⁶ ポークラートの指導による心身の訓練について、その一例を挙げてみよう。

筋肉を強くするためには、鉛で二つの大きな塊がつくられた。その各々は八、七〇〇カントーの重さがあり、鉛鈴と名づけられた。ガルガンチュアはこれらを地上から左右に持ちあげ、頭上の空中に支えた。彼は激動だにせず、その状態を四〇分以上も保ったが、なにびとも比肩しえないほどの力を身につけたわけである。また、棒を用いて、もっとも強い人びとと闘い合い、打ちこまれても、両足を強固に踏まえ、その姿勢を揺がせるほどの相手にだけ、さらに大たんにたち向かった。(中略) こうして時間を過すと、身体を摩擦し、汗を拭い、着物を着換えて、気持よく帰途についた。そして、どこかの牧場や草地を通りかかると、ガルガンチュアたちは、樹木や草花を観察し、植物について記した古代の書籍に、そ

れらを照合したのである。¹⁷⁾

ラブレールの思想においては、こうしたさまざまな能力の育成が、中世的規範からの離脱、現世的幸福の実現と深い連関を有している。ポークラートの採用した新しい方法、すなわち肉体の訓練と精神の錬磨の統一、自発的意志と実際の経験の尊重は、まさにそれが生産労働や社会的実践を可能とし、民衆の利益と幸福を増進するからにほかならない。すぐれた能力とはなにか、立派な資質とはなにかは、『ガルガンチュア物語』にあつては、侵略から祖国を救った英雄ジャンの人間像のなかにみごとに表現されている。天国での幸福ばかりを考え、宗教的戒律の遵守に腐心する僧侶たちに、この人物を対置して、ラブレールは次のように書いている。¹⁸⁾

修道僧は、農夫のように耕しもせず、軍人のように祖国を守ることもなく、医者のように病人を治すのでもなく、すぐれた福音伝道者や教育者のように世の人びとに説いたり、教えたたりもせず、商人のように国のため必要な便宜物資を運ぶこともしない。これこそ僧侶がだれからも嘲られ、嫌われる理由なのだ。(中略) ジャン殿はけっしてこうした狂信家ではない。わざわざぼろを着てみせたりはしない。この人は誠実で、快活で、果敢であり、友として楽しい。仕事も厭わず、

労苦からも逃げない。虐げられた者を守り、悩む者を慰め、苦しむ者を助ける人なのだ。¹⁹⁾

このようなラブレールの理想の根底には、人間の本性に対する熱烈な讃美、人びとの素質についての無限の信頼が横たわっている。ガルガンチュアとジャンによって創立された有名な学園テレームはいっさいの規則や拘束を排し、生活のすべてを成員の自由な意志に委ねた。しかし、そこにおける男女は、けっして怠惰や放縦に陥ることなく、自発的な学習や訓練によって、強健で、聡明で、有徳な人物へと成長するのである。人間の本性は悪への傾向を有し、人びとを正しく導くには監督と強制が必要である、と説くカトリック教会とは異なつて、自由の原理と適切な環境を授かるならば、あらゆる男女は高度の能力を獲得できる、とラブレールは主張する。

テレームにおける人びとの生活は、法律や法規あるいは規則に従つてではなく、各自の希望と自由意志により行なわれた。起きるのがよいと思われたときに、彼らは起床したし、好きなときに飲み、食べ、働き、眠つたのである。だれに起こされることもなく、飲み、食べ、そのほかにやるにしろ、だれにも強いられることはなかった。そのようにガルガンチュアが定めたのである。彼らの規則というのは次の一

条だけであつた。欲するところをおこなえ。なぜなら、生まれもよく、正しく養われ、誠実な友人と交わる自由な人びとは、徳に励み、悪を避けることをたえず促す本能と衝動を自然に具えているからである。これを人びとは誇りと名づけている。ところが、もしも賤しい従属や拘束によって抑圧され、支配されると、彼らはすすんで徳へと赴かせた高貴な情念を転じ、そうした束縛を除去し、破棄するにいたる。というの、私たちはつねに禁止された事柄を企て、拒否された事柄を切望するからである。²⁰⁾

でも、人間の能力と行為を決定するのは、習慣と慣習、経験と教育にほかならない。モンテーニュは書いている。

新たに発見されたあのインド大陸には、さまざまな風土のもとに、多くの民族が生活していることがわかった。彼らはいなご、蟻、とかげ、こうもりなどを常食とし、かつ貯蔵と飼育も行なっている。そして、食べものが不足するときには、一匹のがまが六エキュで売られた。彼らはこうしたものを料理し、いろいろに味つけする。しかし、私たちの食卓にのぼる肉や食物のなかで、有害とされ、命取りになるといわれるものもある。「習慣の力は大きい。獣師は雪のなかで、夜をすごし、山の焼きつく太陽にも耐える。拳闘の選手は籠手で打ち込まれても、呻きもしない。(キケロ)」

(2) 経験の原理との関連で—モンテーニュを通して—

新しい人間の形成

とらルネッサンスの課題は、モンテーニュ(Michel Eyquem de Montaigne, 一五三三—一五九二)によって詳細に検討された。人びとの知能や性格は、環境と教育に左右される、との思想は、すでに『ガルガンチュア物語』の基調をなしていたが、モンテーニュの名著『随想録』は、多くの伝聞や資料を蒐集し、人間を形成するさまざまな要因の分析を試みている。彼によれば、この世に存在する驚くべき才能や事業も、日々の習慣や絶えざる訓練によって造られたものであり、各国の法や道徳もそこにおける歴史や慣習の相違に応じて、きわめて多様なのである。簡単にいうならば、個人の次元にあつても、また民族という規模にあつても、

習慣と訓練が人間形成の主たる要因であるとすれば、子どもを育てる両親や教師の役割は重要である。このような人びとにモンテーニュは、この世でよりよく生きるために、主体的に判断する能力を育成するよう強調する。多くの書物を読み、むずかしい学問を学んだ人物が、なぜしばしば物事の処理に当たつて、実際に無能であるか。人生において真に役立つのは、借りものの權威や鵠のみした知識ではなく、みずから思考し、みずから行動する能力なのである。こうしてラブレールが現世的幸福の増進を、学習や

つねにまっすぐな道をたどれば、迂回した道を駆ける者よりも、はるかに先へ進むことができる。

理性が万人に平等であり、真理を認識するための精神的素質が万人のうちに存するならば、なぜ多くの人がいまも愚かで、無力であろうか。同じ時代に属するイギリスのベーコンは、その著作『新機関』のなかで、理性の行使や学問の発展を妨げるものとして、人びとを取り巻く偏見や因習を指摘し、人間の卑下と醜態を招き寄せる偶像と呼んだ。デカルトもまた書物だけに依存する従来の学問を批判し、モンテーニュの勧めたように、広い世界のなかで、さまざまな人々と交流し、さまざまな経験を蓄積することを試みる。こうした批判と経験を通過してのみ、これまでに教え込まれた誤謬や偏見を除去し、自己の精神的能力を錬磨することが可能となるのである。

人間は無知なものであるとしてこの世に生まれる。そして、初期の認識が弱い感官と教師の權威に導かれるので、理性がまだ指導する力をもたないが、その想念は無数の誤った考えで満たされるにちがいない。したがって、彼の心を占める悪い教えを取り除くために、非凡な資質を活用するか、賢い人びとが十分な指導を行なうことがあとで必要となる。こうした指導によって、彼は確固たる学問の基礎をも学び、自己の認識

三は、自分の思考を秩序づけて導くこと。すなわち、もっとも単純で、認識しやすいものからはじめ、少しずつ段階を追って、もっとも複雑なものへと進むこと。また、本来は脈絡のない事物の間にも秩序を想定すること。そして最後は、なにも欠落していないと確信できるほど、完全な列挙と総合的な検討を広く行なうこと。

デカルトによる新しい方法の探求は、ベーコンにおけると同様に、真理の認識と学問の進歩こそが人類に能力をあたえる、との信念に支えられていた。中世のスコラ哲学が、神の偉大と人間の無力を論証し、封建的な權威と権力を強化する性格を有したとすれば、彼らが着手した学問の革新は、事物の本質と法則の把握とおし、自然に対する人類の支配を拡大する目的をもっていた。したがって、デカルトが明示した、精神を正しく導くための原理は、たんに個人の理性を高めるばかりでなく、人類全体の能力と生活を向上させるものであった。彼はその時代における最高の数学者、物理学者に属するとともに、医学や生理学にも深い関心を抱き、人びとの健康と福祉を増進する学問の建設を試みた。さらにまたデカルトは、継続的で、集団的な研究のためさまざまな分野で多くの人が提携し、協力するように呼びかける。

私が発見したこれらの原理は、生活にきわめて有益な知識

を最高度に高めうる、あらゆる手段を見いだすようになる。

それゆえ、デカルトは中世的な学問と教育の有効性を問いただし、あらゆる知識と教義についてその正当性を追究する。ここにいわれる方法的懷疑が行なわれ、従来の觀念や理論への徹底した検討を経て、真理を認識するための新しい方法が提示された。よく知られているように、ベーコンは真理の源泉を事実と経験にあるとみなし、科学的研究の方法として、実証および実験を強調した。こうしてベーコンが物理学の方法を採用したのに比し、デカルトは学問の模範を数学に求め、明証性を第一の原理に置く分析的方法を提起した。この方法的懷疑と分析的方法が、明証性として神の存在を論証する觀念論的側面を有しつつ、一八世紀の啓蒙思想に多大の影響をあたえることを、のちに私たちは知るであろう。デカルトは自己の方法を次のごとく要約する。

第一は、自分が明らかに真理であると認めるものでなければ、いかなる事柄をも真理として受け入れないこと。換言すれば、連断と偏見を避けるよう用心すること。そして、なんらの疑いも抱かせないほど、明晰かつ判明に精神に示されるもののほかは、けっして自分の判断に取り入れられないこと。第二は、自分が検討する難問の各々を、よりよく解決するために必要なだけ、できるかぎり小さな部分に分割すること。第

へと導くもの、と感じさせた。たしかに、学校でこれまで教えられてきた思弁的な哲学を、実際の学問に置き代えるならば、火、水、空気、星、空、そのほか周囲のあらゆる事物の力と作用を明確に認識することは可能である。あたかも私たちがいろいろな職人のさまざまな職務を明確に知っているのと同じであって、これらを各々にふさわしい用途で役立てることによって、私たちは自然の主人、自然の所有者となる。

(中略) さて、私はこれほど必要な学問の探求に生涯を費すつもりとなり、生命の短さと経験の乏しさという障害がなければ、必ずいつか成功へと導く経路をつきとめたのである。そこで二つの障害へのよき対策として考えたのは、いかに小さくとも、自分の発見を忠実に国民に伝えることであり、またいつそう前進するために、すぐれた人びとを招き寄せることであつた。この場合には、必要な実験にさいして各人の性向と能力に応じた協力を求め、知りえたことを残らず国民に報告することになろう。かくして前の者が到達した地点から後の者を出発させ、多数の生涯と労苦を結合することによって各人が別々に歩むよりも、はるかに遠くへ進みうるのである。

(四) 啓蒙思想における人間の素質と能力

(1) 認識論との関連で—コンディヤックを通して—

フランスの啓蒙思想は

ルネッサンスが提起した新しい人間観と能力観を、いっそう精密に理論づけ、またいっそう大たんな展開を試みた。そして、ラブレレーやモンテーニュが、中世的支配から感性の解放と理性の独立を獲得することを強調したというならば、エルヴェシウスやコンドルセは、新しい社会を構築すべく、政治的平等と国民的福祉の実現という観点から、人間の能力について論究した。

啓蒙の運動は、ルネッサンスの文化と同じく、根本的にはキリスト教やスコラ哲学など中世の思想と対決するものであったが、直接には一七世紀の形而上学者と呼ばれる人びとへの批判から出発した。デカルトの哲学は、この世紀の後半には観念論的な側面がマールブランシュなどに継承され、キリスト教の教義を論証し補強する使命をになつていった。またライプニッツの思想も、科学的で革新的な要素を含みつつ、封建的な身分制国家を神の定めた調和的秩序と説き、中世的規範と絶対王政を正当化する役割を演じていた。そして、これら反動的な思想の共通した特徴は、人間の能力を論ずるにあたって、事物と感覚を認識の源泉とは認めず、真理と正義が神に由来する、と主張することであった。いわゆる生得観念の存在に関して、ライプニッツ (G. Wilhelm Leibniz, 一六四六—一七一六) は左記のように肯定する。

道徳についての学問も、算数と同じく、生得的なものである。なぜなら、内なる光によってあたえられる表徴に道徳も

依存するからである。こうした表徴がはじめは判明に見えなくとも、たいして驚くにあたらない。というのは、なにびとも理解できるあらゆる事物を最初からはっきり見るわけではなく、自然法によって書かれた文字、パウロの言葉を借りれば、神が人びとの精神に刻みつけた文字を急いで読めるわけでもない。しかし、道徳は算数よりも重要であるから、神は人間がはじめに用いるものとして本能を授け、理性の命ずる事柄を理性を働かせずして行なわしめている。(中略) かくして人びとは良心の苛責を受けたり、プラトンに学んだタキトウスが書いたように、苦悶や苦悩に沈んだりする。そのほか未来への怖れや至高の権力への怖れもまた、生まれながらに私たちが有するものである。

人びとの心の底には、神が記した観念が存する、という理論は、アウグスティヌスやアキナスの著作でも、主として人間の認識能力の限界を教えるべく述べられていた。しかもそれは、デカルト学派やライプニッツの思想のなかで重要な部分として再興され、経験と実験の蓄積にもとづく学問の進歩に対し、大きな障害をなしていた。したがって、一七世紀の形而上学と啓蒙思想との対決は、なによりも生得観念の有無に関する論争から開始された。ロックは有名な『人間悟性論』の第一巻をこの問題に当て、生得観念の理論は、感覚と理性による真偽の確証を拒否し、生得的な

のとして偏見や迷信を神聖化する、と批判した。そして、フランスの啓蒙思想に属する哲学者たちは、ロックの批判を継承し、新しい人間観や社会理論を形成する前提として、生得観念の存在を否定した。コンディヤック (Mably de Condillac, 一七一五—一七八〇) はその著作『体系論』において、デカルトとマールブランシュ、ライプニッツとスピノザを攻撃の対象とし、生得観念に關し次のように書いてゐる。

生得観念という体系をいつたいどの民族があるいはどの哲学者が、高々と掲げているか、よく分らない。しかし、この体系が論理的に考へる技術の進歩に非常な妨げとなつてゐることは疑えない。こうした偏見の起源と結果を少しでも考察すれば、私が正しいことを知つてくださるであらう。(中略) 哲学が誕生した頃には、知識を得たいとの気持が強く、観察することが少なかった。観察は遅々としか進まず、自然を占う能力を誇りうる人びとが優秀であると認められた。だが、彼らもほかの人びとと同じく粗雑な知識で出発せざるをえない。そして、このような知識が、幾何学者の言葉を借りれば、彼らの公理となつた。他人から抜き出るには、これらを巧みに用いるしかない。彼らは公理を仔細に考察することなく、きわめて不確かな概念で満足した。出発において誤るのがいかに危険であるか、と悟る経験を彼らはまだもたなかった。

もっともこうした状況は今日でもほとんど変らない。

こうしてキリスト教と形而上学を打ち破るために、知識と道徳の起源に関する新しい理論の形成が必要となつた。観念や知識の源を事物と感覚に求める試みは、すでにベーコンやホブズの仕事にみられるが、ロックの『人間悟性論』は生得観念を斥けるとともに、人間の認識の発展を感覚との関連で詳細に跡づけ、中世的な人間観からの訣別を決定的にした。とはいえ、『人間悟性論』は、外的な事物により惹起される感覚のほかに、精神の独立した働きとして省察を認めたように、なお不徹底な部分を残していた。コンディヤックはロックの業績を受け継ぐとともに、感覚論の立場をさらに貫徹し、感覚から記憶と観念へ、そして知識と判断へと、認識の過程を綿密に究明した。彼の主著である『人間知識起源論』は、フランスにおける啓蒙思想に哲学的基礎を提供したものと評価することができる。

人間が誕生する最初の瞬間を考えてみよう。彼の魂はまずさまざまな感覚、すなわち光、色、痛み、快き、動き、静止などを経験するであらう。これらこそ彼の最初の思考である。ついでこのような感覚から生ずるものを、彼が省察しはじめる瞬間を見つめよう。彼は魂が行なういろいろな作用をしだいに意識することが知られる。すなわち、知覚したり、表象す

ることであって、これらが第二の思考となる。したがって、外的な事物から刺激されるに依りて、私たちは感官を通してさまざまな観念を受け取る。そして、感覚によって誘発される魂のいろいろな作用を省察するに依りて、外的な事物からは得なかったあらゆる観念を私たちは身につける。だから、感覚と魂の作用は私たちが有するいっさいの知識の素材である。

これらのさまざまな素材は、省察により採用され、適合され、相互の間に含まれるいろいろな関係が究明される。しかし、あらゆる成功はいかなる環境でなされるかに依存する。そして、もっとも望ましい環境とは、省察するに適した事物がもっとも多く入手できる環境にほかならない。たとえば、人びとを統治すべく生まれた方が置かれる環境は、きわめて広い見識の持主となる機会を提供する。また、よく上流社会に招かれ、立派な演奏を見せる人が、天賦の才能があると誉められる。だが、実際にはそれは練習の賜物であり、それを形成した要因が知られないだけである。

このようなコンディヤックの認識論が新しい学習方法や教育理論の創造へと導くことは、容易に察知できるであろう。『人間知識起源論』においても彼は子どもの学習と教育について言及し、幼時からの感官の訓練、理性を行使するための指導の重要性を指摘した。こうした提案はすでにラブレールやモンテーニュの著作に

べき第一の事項は、子どもの精神をあらゆる働きができるよう訓練することである。このためには子どもに無縁な事物を求めてはならない。

しかしながら、コンディヤックの努力の大半は、子どもの理性を個々に育て、指導することではなく、むしろさまざまな学問の進歩を促し、人類全体の能力を向上させることに注がれていた。フランス啓蒙思想のなかで、彼の『人間知識起源論』と『体系論』は、ダランベールが書いた『百科全書序説』とともに、科学方法論としてもっとも緻密な著作に数えられる。そして、コンディヤックは生得観念の否定と実証と分析に依拠する認識方法の確立によって、キリスト教の説く人類の本来の無力を論破したばかりでなく、自然や社会についての科学的認識の発展を通じ、人類の能力が限りなく拡大しうることを示唆したのであった。

真理を発見するため従うべき秩序とは、すでに私が分析を論じたさいに示したものと同一である。すなわち、観念の源泉に溯り、それらの生成を跡づけ、それらをさまざまに構成し、分解し、あらゆる側面から比較しつつ、それら相互の関係を究明することである。さらに私は真理を発見するための精神的態度に言及しよう。どんな事柄を研究したい場合でも、それに関する知識をまず吟味することが必要である。そ

も示されているが、コンディヤックはこれを認識論との関連で論理づけるとともに、のちに書かれた『感覚論』や『パルム公太子のための学習教程』のなかでいっそう具体的に展開することとなった。

おとなを導く方法として、これまで私が提示してきたやりかたは、子どもを導く場合にも、もっとも重要な方法である。子どもといっしょに遊びながら、彼の魂を働かせるために、受け入れるかぎり、さまざまな訓練を行なうがよい。さきに述べたように、どんな事物でも、これに役立つはずである。子どもには、いろいろな事物を秩序よく整理する習慣が知らぬ間に身につくかも知れない。のちになって、年齢と環境が変わり、ほかの事物を扱う場合にも、こうした子どもの精神は、完全に発達していることが認められるであろう。こうして彼が若いときに習得した明敏さは、ほかの方法によれば、ずっと年とってからしかもちえないか、あるいは永久にもちえないものである。したがって、子どもに学ばせるべき事柄は、ラテン語でも、歴史でも、地理でもない。まだ思考することもできない年齢で、こうした学問を学ばせて、どんな利益があるだろうか。私ならば、物識りだと誉められる子どもを気の毒に思う。そうした子どもの凡庸さ、さらには愚鈍さにいつか啞然とするのが眼に見える。重ねていうが、考慮す

うした知識がどのように生まれたかを検討し、観念を厳密に規定するがよい。

(2) 政治の改革との関連で—エルヴェシウスを通して—

素質および能力

力の平等という見解は、エルヴェシウス(Claude Adrien Helvétius 一七一五—一七七二)の著作のなかに、きわめて明瞭に表現されることとなった。彼は人々の精神的素質に生まれながらの優劣があることを否定し、能力や性格の相違は、社会的な要因、とくに教育と政治の如何により生まれる、と主張した。そして、こうしたエルヴェシウスの能力観は、絶対君主や特権身分の權威を否認し、第三身分の政治的權利を要求する姿勢と密接な関連を有していた。

君主や領主の権力は神の授けたものである、との教えは『聖書』や『神学大全』にも記されているが、この教義を体系化して一七世紀には王権神授説が現われた。フィルマー(Robert Filmer, 一五八八—一六五三)やボッシュエに代表される王権神授説は、封建社会の再編として成立した絶対王政を擁護するために喧伝され、中世的な支配への抵抗を強める農民やブルジョアに對し理論的武器として用いられていた。したがって、人民主権や政治的權利の獲得を要求する近代の政治理論には、なによりも王権神授説を論破することが必要であった。ロックの『政治二論』

やルソーの『社会契約論』において、フィルマーへの批判が重要な部分を占めるのはこうした事情による。ところで王権神授説は共通の特徴として、神の委託をうけた権力者の聡明さと有徳さとを讃美し、つねに服従すべき人民の愚昧さと罪深さを描き出す。そして、こうした人民の能力への蔑視や不信は、君主政治を讃美し、民主政治を非難する有力な根拠となっていた。典型的な文献として、フィルマーの『族長論』の一節を挙げてみよう。

民主国家を経験したことがあり、人民の生活をよく知る人びとは次のように書いている。「人民ほど不確かなものはない。彼らの意見は嵐のように変わりやすく、唐突である。彼らがいうことには、真理も判断もない。彼らは物事を判断する知恵をもたず、その行動は非道で軽率であり、真理と虚偽をなんら区別しない。さきを走る首領についていく様子は家畜を思わせる。彼らは羨望の眼で他人の幸福を眺める。彼らは習性としてもっとも悪いもの、もっとも弱いものを好む。彼らはきわめて疑い深く、あいまいな嫌疑で他人を糾弾する。彼らはあらゆる報道、とくに悲惨な報道をすぐに信じこみ、実際よりも誇大に考える。彼らはさまざまな災厄を想像によって造り出し、それに怖れおののく。そして、彼らは目新しい動乱や変革をなによりも好み、平和と静穏を忌み嫌う。」

か。君の選んだ研究の主題が適切かどうか。君が思考する習慣を得ているかどうか。また、君がどんな書物を読んでいるか。君がどんな人物とつきあっているか。さらに、君の日々の生活で、その間に偶々どんなことが起こるか。このように考えてみると、すぐれた人間を造り出す要因のなかで、体質の相違から生ずる注意力の強弱などは、まったく些細なものである。だから、人びとの身体構造の違いにより精神の不平等が存在する、というのは暴論である。どんな体質が優秀な人間を形成するのにもっとも適するか、いかなる観察もまだ明らかにしていない。また、大きな人か小さな人か、肥えた人か瘦せた人か、胆汁質か多血質か、どんな人物がもっとも恵まれた精神的素質を有するのか、まだ分っていない。

こうしてエルヴェシウスは生物学的な能力観を批判するとともに、コンディヤックの認識論を基礎としつつ、人間の精神活動について詳細な検討を行なった。私たちのあらゆる知識と観念は、『人間知識起源論』で示されたように、感覚と感官に源を発している。さまざまな感覚は、私たちのなかで結合され記憶されて、観念となり、言語となる。人間の認識はこれらの感覚や観念を明確にし、連合することを通して、相互の異同や関連を把握し、しだいに高度なものへと発展するのである。ところで、こうした精神の働きは、私たちの各々が有する注意の集散や情念の強弱に依

このように王権神授説においては、権力者と人民の精神的能力の不平等が強調される。さきに示したパウロの書簡や『神学大全』と同じく、こうした精神的素質の階級的な不平等は、神の意志に由来し、身体的特徴の相違や自然的事象の変化によって表示される、と論証された。これに対し啓蒙の時代には、まず精神的不平等の神聖さや絶対性を打消し、不平等を医学や生物学の観点から検討する試みが現われた。ラ・メトリーの『人間機械論』とモンテスキューの『法の精神』がそれである。ラ・メトリーの著作は、精神作用に及ぼす肉体組織や生活物資の影響に注目し、医学と生理学の重要性を認める唯物論的な色彩が濃厚である。また、モンテスキューも各国の政治形態や国民精神の相違を、気候や国土の多様に基づくとし、絶対王政を相対化する進歩的側面を有していた。しかし、これらの人びとの思想は、個人や民族の形成において、自然的要因を過大に評価し、主体的な人間による変革を見失う宿命論への危険をはらんでいた。生物学あるいは風土論の立場に立つ、このような人間観の論議からエルヴェシウスの活動は始まった。彼の『精神論』は、素質と能力の問題を扱って次のように述べている。

いま君がなにか研究を始めたと仮定する。君が成功するかどうかは、確かに次の条件によって決まるだろう。すなわち、君の趣味、財産、身分は研究を散漫にする程度のものである

じて、あるいは活発となり、あるいは停滞する。というのは、ある事柄を追求するに当たって、集中した注意と、強い情熱で臨めば、分析も緻密となり、判断も正確となるであろうから。そして、エルヴェシウスによれば、このような注意の集散と情念の強弱を決定する要因こそ、体質や感官の優劣ではなく、後天的なもの、社会的なものにはかならない。なぜなら、なにも習慣と訓練によってのみ、学習や修業に専念することが可能となり、かつまたすぐれた研究や活動に利益や名誉がもたらされる社会でのみ、これらを遂行する情熱が育ちうるのである。こうしてエルヴェシウスは、情念と情熱の生成における教育方法や政治形態の決定的役割を解明し、認識の発展、精神の不平等を社会的に把握する独自の人間観を提示する。

人びとの間に認められる精神の不平等は、彼らを治める政治の如何、彼らが生まれた時代の如何、彼らが受けた教育の如何、すぐれた人間になりたいとの願望の如何、考察する事象についての観念の如何にのみ由来する。したがって、天才もまた、その人が置かれた環境の産物にはかならない。だから教育の技術とは、知と徳への萌芽が育つに適した環境に、青少年を置くことに存する。私がこう結論する理由は、逆説を好むためではなく、ひたすら人びとの幸福を念願するからである。すぐれた教育は英知と徳性を、したがってまた幸福を、社

会のうちに弘めるであろう。しかし、知性と徳性はまったく自然の産物である、と人々の信じこむことが、どれほど学問と教育の進歩を妨げ、怠惰と怠慢を助長するだろう。自然および教育が与える影響を検討し、教育こそ私たちを形成すると断ずるのもこのような見地からである。⁶⁷

国々の制度や慣習の多様性が、さまざまな民族の間に能力や性格の相違を生む——こうしたモンテーニュの思想をエルヴェシウスは大だんに展開し、専制政治のもとでは国民が卑屈で無能となり、民主政治のもとでは率直で聡明な国民が育つ、と力説する。そして、このように人間形成の中核的な要因として政治や法律に注目したことは、たんに風土論的な人間観を打破るばかりでなく、精神の不平等を国民的課題として克服する道を切り拓いた。エルヴェシウスが作成した詳細な教育計画の構想は、人間形成における政治教育の重視、教育改革と政治改革との結合によって、生彩あるものとなった。⁶⁸ 国民的な規模での教育の改善と実証的な教育科学の確立を提起した晩年の作品『人間論——その精神的能力と教育』のなかで、彼は次のように断言する。

道德教育におけるあらゆる重要な改善は、法律および政治形態の改革を前提とする。いま悪辣な政府のもとで、すぐれた教育の構想を提起したと仮定する。こうした新しい教育で

学ぶ事柄は、その国の風俗や政治と矛盾するはずである。それらは必ず悪とみなされる。すぐれた構想はいつ採り上げられるだろうか。国民が大きな不幸、大きな災厄を経験したとき、君主が意外な、かつ異常な状況に直面して改革の必要を感じたときである。⁶⁹

さて、このように精神的素質の平等を主張し、教育と環境の改善を提唱するにあたって、エルヴェシウスはいかなる能力の育成を意図したのであるか。しばしば非難されるごとく、彼の『精神論』と『人間論』は、天才を無数に製造することを試みたり、各人の才能や資質を画一化することを促したのであるか。たしかに彼の著作のなかには、この種の誤解を招く表現も含まれており、それらはルソー、エルヴェシウス、デイドロの間に論争を惹きおこす誘因ともなっている。⁵⁰ しかし、エルヴェシウスの教育改革の構想はのちに検討するコンドルセの場合と同じく、当時における第三身分の政治的要求との関連で理解することがたいせつである。彼が国民のすべてのなかに育成するよう望んだのは、封建道徳や絶対王政を批判的に認識できる能力、新しい社会を建設するため政治的権利を獲得し行使しうる能力であった。⁵¹ 彼は教育改革の立案において、『道德教育』すなわち政治教育をその中核に据え、道德および政治の起源を人びとの生命と生活の維持に溯りつつ、左記のごとく提起する。

道德の科学の基本原則を、肉体的感性という単純な事実に戻元しよう。そのときには、道德の科学はあらゆる年齢、あらゆる精神の人びとの習得できるものとなり、万人が道德について同一の観念をもつことができる。(中略) こうして人び

とは、現在の道德において讃美されている公理「おのれの欲せざるところを人に施すなかれ」が末梢的で閉鎖的な格律であることを理解するにいたる。その格律は祖国に対する義務を市民に教えるのには、まったくもの足りない。ただちにこの公理を「公の福祉こそ最高の法」と宣する公理に代えるがよい。後者は前者の意義をも含みつつ、より一般的で、より明快であり、さまざまな地位のあらゆる市民、すなわち町人にも判事にも大臣にも、平等に適用されうる。そして、この高い原理に照らされて、国民の日々の権利を定める各国の制度や法律を究め、自己の義務の種類や自国の慣行、法律、慣習の賢愚をより個別的に学ぶことができる。この偉大な原理を、法律の賢明さと公正さを測る基準として、つねに念頭に置けば、各人は正しい判断をくだすことが可能である。⁵²

(3) 人類の進歩との関連で——コンドルセを通して——

近代の人間観および能力観の形成はなによりも神の万能と人類の無力を説く、キリスト教との対決から出発した。人類が悲惨な状態を脱しうるために

は、神の恩寵と助力が不可欠である、との教えは、スコラ哲学の重要な教義の一つであったが、一七世紀の形而上学や王権神授説は、これをいっそう綿密に練りあげていた。現存する封建制度や絶対王政を神の英知から造られた予定調和と説明するライブニツ、人類の歴史や各国の盛衰は神の摂理により導かれていると述べるボシエ (Jacques Benigne Bossuet, 一六二七—一七〇四) がそれである。これらの人びとは、神への畏怖と信仰を保持し、自己の無知と無力を知ることを通してのみ、人類は幸福に到達できると主張する。ボシエはその『世界史観』で書いている。

さまざまな帝国を建てたり滅ぼしたりした個々の原因が、神の摂理から発した秘かな命令によって、長い連鎖に結ばれていることを、想い出してほしい。神は天上の高みからあらゆる王国の手綱をとられ、あらゆる人の心を掌中に握られる。神は人びとの情念をあるいは引き締め、あるいは解き放ち、かくして人類の全体を動かされる。(中略) 神は人間の知恵がどの点においても浅はかなのを知っておられる。神は人びとの眼を開き、彼らの視野を拡げ、みずからが無知であることを自覚させる。また、神は人びとを盲目にし、急ぎたて混乱させる。人類はみずからの才知によりかえって蒙昧となり、困惑する。みずからの配慮もかえって自己が陥る罠となるのである。こうしたやりかたで神は、つねに誤ることのな

い正義の規範に従いつつ、驚嘆すべき判断をくだす。神こそがはるか未来に起こる事象をあらかじめ計画され、また神こそがさまざまな動乱や、はるか彼方に生ずるその反動までも予定される。⁶³

人類は無限に進歩する、というコンドルセの思想は、このような歴史観の原理的な否定のうえに成立した。彼によれば、人類の歴史は摂理によって予定され教導されるものではなく、人びとがみずからの努力や活動を通し、自然と社会に対する支配を強めてきた歩みである。彼の『人間精神進歩史素描』は、コンディヤックの認識論やエルヴェシウスの社会理論を適用し、各人の生命と生活を維持する必要から、労働と産業が発生し、人びとの間に契約や制度が設けられた、と歴史を分析する。そして、ボシエが既存の道徳や法律を神聖で不変のものと教示するに反し、コンドルセは理性の進歩や学問の発展に応じて、政治形態や経済制度もまた改善を要する、と説明する。

無数の世紀にわたって、つねに自己を更新しつつ、人類がいかなる変容を遂げたか、を考察しよう。人類がこれまでに経てきた道徳や、真理と幸福に向かう歩みをそこに見出すことがたいせつである。人類がかつてどうであったか。人類がいまなんであるか。これらを検討するならば、人類の本性から

な期待できる新しい進歩を、確保し促進する手段があたえられる。これこそ私が企画する著作の目的であり、推論と事実によって次のごとく結論することになろう。自然は人類の能力の発展にいかなる限界も定めていない。人間の発展能力は実際に無限であり、人びとの無能を欲するあらゆる権力から独立し、また地球が存続し、私たちを住まわせるかぎり、こうした能力の進歩はいかなる終点も有しない。⁶⁴

かつてラブレールは自由な雰囲気と自発的な学習を通し、個人のさまざまな能力が十全に開花することを夢想した。さらにモンテ・ニューは人びとが民族や階級の差異にとらわれず、人間としての見識や徳性を身につけるよう勧告し、デカルトもまた学問の発展と技術の進歩によって、人類の力能と福祉が増進することを念願した。⁶⁵このような理想が、人類の歴史の所産として、必ず実現するであろう、とコンドルセは予言する。彼によれば、人類の未来において、民族と民族の間の不平等の消滅、階級と階級の間の不平等の除去、各人の肉体的・精神的発展を達成することが可能なのである。

いかなる民族も、仏人や英米人と同じくもつとも聡明で、もつとも自由で、偏見からもつとも解放された民族が到達した状態にいつか近づくであろう。民族と民族の間の大きな落差、

すなわち、国王の支配から生ずる隷属状態や、アフリカ土民の野蛮と未開人の無知は、徐々に消散するであろう。自由の享受や理性の行使を、自然が住民に禁じている国が、地上に存在するであろうか。現在のところいかなる文明民族においても、民族を構成するさまざまな階級の間に、英知や能力や財産の差異が認められる。社会の最初の歩みによって増大され、いわば産出されたこの不平等は、文明それ自体に由来するか、それとも現実の社会機構の欠陥に由来するであろうか。こうした不平等はたえず弱められ、社会機構の究極の目標である人為的な平等に席を譲るであろう。能力の自然的差異から生ずる結果をこのような平等は軽減し、万人の利益に役立つ不平等しか残さないからである。かくして依存や屈従や貧困を伴うことなく、文明、教育、および産業の進歩が促進される。(中略) さらにまた、人類は学問や技芸の新しい発見により、あるいはその必然的な結果として、個人の幸福や社会の繁栄を導く新しい方法の発見により、自己を改善するであろう。行為の原理や実践的な道徳における進歩、さらには精神的・道徳的・肉体的能力の真の発展もこれに役立つであろう。このような発展は、さまざまな能力を強め、活用する手段の改善によっても、また人間が生得的にもつ身体構造の改善によっても助長されるにちがいない。⁶⁶

しかしながら、こうしたコンドルセの教育理論は、将来に実現すべき遠大な理想と、各人の諸能力の十全な発展への志向を含みつつ、より緊急な課題になっていた。デカルトによる学問の前進への呼びかけ、エルヴェシウスによる政治および教育の改革への訴えは、第三身分の経済的自立や政治的自覚を背景としていたが、コンドルセの教育計画は、フランス革命の推進と人権宣言の貫徹と直接に結合したものであった。⁶⁷それゆえ、彼の提案においては、普通教育であると成人教育であるとを問わず、人民の政治的参加を有効にし、政治的権利の行使を強力にするための学習がもつとも重視される。そして、このような政治に参与する能力は、科学的認識の発展と公教育制度の確立を通し、万人のうちに育成することが可能であるという。かくして封建社会の身分的秩序とのかかわりで提起された、人間の素質と能力の問題は、ブルジョア革命の時期におけるコンドルセの思想のなかで、一つの帰結に到達するのである。

各人は新たに提案され、公布されるさまざまな法律を学び、行政の各省で遂行され、用意されるさまざまな機能を知ってつねになんらかの方法で自国の法制に精通することが必要である。しかし、これだけでは足りない。新しい政治課題を討議し、新しい原理で社会機構を築こうと欲するならば、問題がどこに存するか、そうした原理からいかなる論争が生ずる

か、を認識する必要がある。実際にこの種の教育なしには、祖国がだれによって統治され、祖国になにが期待できるか、を人びとは知りえない。自分にとって、なにが利益になり、なにが災厄になるかも分らないであろう。こうした学習を欠けば、国民は二つの階級に分離され、迷わずにせよ、導くにせよ、指導的な役割を演ずる一方の階級は、盲目的な他方の階級にまったく受動的な服従を要求するであろう。(中略) 政

治の科学もほかの学問と同じく、かつて天才が幾年もの考察を要した事柄を、ときには数時間の注意でもって十分に理解できる。なお、この教育では、法律のあらゆる条項、行政のあらゆる機能、政治のあらゆる原理と手段を、人間の権利に照らして考えさせるがよい。かくして権利の宣言は、すべてが比較され、すべてが測定される公の尺度となるのである。

特殊研究 一

- (1) 中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」、文部省、一九七一年、一七—三三頁。
- (2) 教育制度検討委員会梅根悟編「日本の教育改革を求めて」、勁草書房、一九七四年、八〇—八六頁。
- (3) Programme pour un Gouvernement démocratique d'Union populaire du Parti communiste français. (L'Humanité, le 12-octobre-1971, p. 9.)
- (4) Programme de Gouvernement du Parti communiste français et du Parti socialiste, Partie 1. Chapitre 4. (L'Humanité, le 28-juin-1972, p.6.)
- (5) 素質と能力の問題を教育思想の歴史の中に究明する作業は、本格的にはまだなされていない。しかし、本稿の研究意図と類似する試みとして、古くはクループスカヤの「国民教育と民主主義」があり、また「岩波講座 現代教育学 4 近代の教育思想」には、いくつかのすぐれた論文が含まれている。なお、公教育の理念、教育権の成立、生産と教育の結合などを主題として、これまでなされた内外の労作から筆者がさまざまな示唆を得ていることはもちろんである。
- (6) 篠原助市著「欧洲教育思想史」玉川大学出版部、一九七二年、上巻、三五—三六頁。
- (7) La Sainte Bible: La Genèse, Chapitre 3, traduite sous la Direction de l'École Biblique de Jerusalem, Paris, 1961, pp. 11-12.
- (8) Augustine: The City of God against the Pagans, Book 13, Chapter 13, translated by Levine, London, 1966, Vol. 4, pp. 178-179.

- (9) Augustine: On Christian Doctrine, Book 2, Chapter 7, translated by Robertson, New York, 1958, pp. 38-39.
- (10) 篠原助市著「前掲書」上巻、二九—三二頁。
- (11) Thomas D'Aquin: Somme théologique, Les origines de l'homme, question 96, traduction par Palfort, Paris, 1963, pp. 199-200.
- Thomas D'Aquin: Somme théologique, La Pensée humaine, Question 85, traduction par Weber, Paris, 1963, pp. 112-113.
- (12) ニンゲルスは述べている。「教会の教義はそのまま政治の公理であり、聖書の言葉はどの法廷においても法律と同じ力を有していた。独立した法服身分が形成されてからも、神学はながいあいだ法学の後見人であった。そして、精神活動のあらゆる領域における神学の君臨は、現存の封建的権力を普遍的に統率し聖化する教会の役割から、必然的に生じたものであった。」Engels, Der deutsche Bauernkrieg. (Marx-Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin, 1960, Band 7, p. 343.)
- (13) La Sainte Bible, Épître aux Romains, Chapitre 13, op. cit., p. 1507.
- (14) Rabelais: La Vie très horrible du grand Gargantua, Chapitre 7. (Oeuvres complètes, par Jourda, Paris, 1962, Tome 1, p. 33.)
- (15) ポノクラートによる教育は、たんに自然の観察や身体訓練にとどまらず、生産技術の習得、職業的活動の見聞を含むことに注目すべきであろう。これに関しては、梅根悟著「西洋教育思想史」誠文堂新光社、一九六八年、第一巻、二〇—二五頁。
- (16) Rabelais: op. cit., chapitre 23. (Oeuvres complètes, Tome 1, p. 95.)
- (17) ラブレールの教育理念は百科全書的なものに還元したり、あるいはデルケームのように貴族主義的なものと把握することに筆者は疑問を抱く。多くの教育史にはポノクラートによる教育やテレームの学園がとりあげられているが、「ガルガンチュア物語」を統一的に理解する必要がある、そのためにはジャンの人間像、さらにはガルガンチュアあてのグラングウジェの書簡を重視すべきであろう。Durkheim: L'Évolution Pédagogique en France, Paris, 1969, pp. 249-251.
- (18) Rabelais: op. cit., Chapitre 40. (Oeuvres complètes, Tome 1, pp. 152-153.)
- (19) Ibid., Chapitre 57 (Oeuvres complètes, Tome 1, pp. 203-204.)
- (20) Montaigne: Les Essais, Livre 1, Chapitre 23. (Oeuvres complètes, par Armaingaud, Paris, 1924, Tome 2, pp. 2-3.)
- (21) モンテーニュの批判は、主として中世的な教育とスコラ哲学に向けられたと解すべきで、学問や教育それ自体の意義を否定する「教育における虚無主義」とみなすデルケームの意見には賛成できない。Durkheim: op. cit., pp. 256-260.
- (22) Montaigne: op. cit., Livre 1, Chapitre 25. (Oeuvres complètes, Tome 2, p. 73, p. 77.)

- 24 「モンテーニュは、普通教育のあるべき姿について完璧な設計図を画いた。すなわち、えらい学者やえらい作家になるつもりでない大多数の人びとに、自己の判断と理性をどう用いるか、を明示したのである。」コンペールによるこの評価は適切と思われる。Compayré; *Histoire critique des Doctrines de l'Éducation en France*, Paris, 1878. Tome 1, p. 104.
- 25 Montaigne; op. cit., Livre 1, Chapitre 26. (Oeuvres complètes, Tome 2, p. 126~127.)
- 26 『方法序説』は近代教育の基盤として役立ついくつかの重要な原理を含む。まずそれは人びとの精神の平等を肯定し理解し認識するための素質が人びとに普遍的であることを認める。Compayré; op. cit., Tome 1, p. 367.
- 27 Descartes; *Discours de la Méthode*, Partie 1. (Oeuvres, par Adam et Tannery, Paris, 1908. Tome 6, pp. 1~2.)
- 28 Descartes; *La Recherche de la Vérité par la Lumière naturelle*. (Oeuvres, Tome 10 pp. 495~496.)
- 29 デカルトの仕事が啓蒙思想にあたえた影響は、たとえば次の論述によって端的に知りうるであろう。D'Alembert; *Discours préliminaire de l'Encyclopédie*. (Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des Sciences, des Arts et des Métiers, Paris, 1751, Tome 1, p. xxv~xxvi.)
- 30 Descartes; *Discours de la Méthode*, Partie 2. (Oeuvres, Tome 6, pp. 18~19.)
- 31 デカルトを然るべく位置づけた教育史の研究は少ないが、次の論文は、この哲学者の試みを、世界認識の改善によって、世界の再構成を導くものと評価し、近代の教育方法の源泉と考えている。砂沢喜代次「近代教育方法原理の形成過程」(講座現代教育学 4 近代の教育思想、岩波書店、一九六一年、三八一四三頁)。
- 32 Descartes; *Discours de la Méthode*, Partie 6. (Oeuvres, Tome 6, pp. 61~63.)
- 33 「一八世紀のフランス啓蒙思想」なかでもフランス唯物論は、現存する政治制度ならびに現存する宗教と神学に対する闘争であるばかりか、同時に一七世紀の形而上学およびあらゆる形而上学、すなわちデカルト、マルブランシエ、スピノザ、ライブニッツに対する公然かつ明白な闘争であった。Marx; *Die heilige Familie*, (Marx-Engels Werk, Band 2, p. 133. など) マルクスのこの書物は、フランス唯物論を概観し、コンディヤックやエルヴェシウスを位置づけるための重要な論述を含んでいる。
- 34 Leibniz; *Nouveaux Essais sur l'Entendement*, Livre 5 Chapitre 2. (Philosophischen Schriften, von Gerhart, Berlin, 1882, Band 5, pp. 84~85.)
- 35 Locke; *An Essay concerning Human Understanding*, Book 1. Chapter 3. (Works, London, 1832. Vol. 1, pp. 27~30.)
- 36 Condillac; *Traité des Systèmes*, Chapitre 4. (Oeuvres complètes, par Thery, Paris, 1821. Tome 2, pp. 66~67.)
- 37 Condillac; *Essais sur l'Origine des Connaissances humaines*, Partie 1. Section 1. Chapitre 1. (Oeuvres complètes,

Tome 1, pp. 12~13.)

- 38 コンペールは主として「学習教程」を分析し、コンディヤックの教育史における意義を次の三点とする。①観念連合を思考の原理として提示した。②みずから省察することの重要性を指摘した。③それまでの中世的な学校や教育の実態を批判した。しかし、コンペールによっても、コンディヤックの認識論がフランス啓蒙思想のうちで果たした役割は十分に評価されていない。Compayré; op. cit., Tome 2, pp. 163~165.

- 39 Condillac; *Essais sur l'Origine des Connaissances humaines*, Partie 2. Section 2, Chapitre 3. (Oeuvres complètes, Tome 1, pp. 378~379.)

- 40 松平斎光著「フランス啓蒙思想の研究」、有斐閣、一九五八年、一三九一二五七頁。

- 41 Condillac; *Essais sur l'Origine des Connaissances humaines*, Partie 2, Section 2, Chapitre 3. (Oeuvres complètes, Tome 1, pp. 378~379.)

- 42 素質と能力の問題におけるエルヴェシウスの思想の意義を、とくに高く評価したのは、ジェームズ・ミルであった。「残された問題のうち重要なものとして、人間本性が有する有益な資質は、どの程度まで教育により形成できるか、との問いがある。これこそ有名な論争の主題となり、賛否いずれの立場にも最高の權威ある人びとを有している。一方の側は実際には、エルヴェシウスがひとりで頑張り、主役を演じている。おそらくエルヴェシウスほど教育の理論を仕上げるのに貢献した者はないであろう。教育の基礎を理解したいと望むならば、結論を全面的に採用するか否かは別として、この哲学的な研究者の論述を深く学ぶことが目的に役立つことはなす。」James Mill; *Education*. (Supplement to the Encyclopaedia Britannica, London, 1824. Vol. 4, p. 18.)

- 43 Filmer; *Patriarcha*, Chapter 18, Oxford, 1949, pp. 89~90.

- 44 「猛暑は人間の力と勇気を弱める。反対に、寒い気候のもとでは強い肉体と精神が生まれ、それらが偉大な行為や大たんな行為を忍耐強く続けさせる。(中略)したがって、暑い気候のもとでは、国民は怠惰であってつねに奴隷となり、反対に寒い気候のもとでは国民は勇敢であって、つねに自由を維持する。」Montesquieu; *De l'Esprit des Lois*, Partie 3, Livre 17. Chapitre 2. (Oeuvres, Complètes, Par Caillois, Paris, 1951)

- 45 Helvétius; *De l'Esprit*, Discours 3, Chapitre 4. (Oeuvres complètes, par Belaval, Paris, 1795. Tome 3, pp. 209~210.)

- 46 認識の発展に関するエルヴェシウスの分析のなかには、社会心理学や学習心理学の見地から興味深い示唆が少なくない。これについて、やや詳しくは、拙稿「エルヴェシウスの教育思想—平等の理論を中心に」(日本教育学会編「教育学研究」第三二巻第二号、一九六三年)。

- (47) Helvétius: De l'Esprit, Discours 3, Chapitre 30. (Oeuvres complètes, Tome 5, pp. 92~94.)
- (48) 梅根悟氏は本邦における通史のなかで、はじめてエルヴェシウスについて詳説され、教育改革と政治改革の結合の点に、最大の教育史的意義を認める、との見解を示された。梅根悟著「西洋教育思想史」第二巻、誠文堂新光社、一九六八年、八九―九二頁。なお、エルヴェシウスが専制君主による改革を考えていた、との見方もあるが、筆者は精神的素質の平等という論理からも君主への期待は稀薄であり、学問の進歩と社会の変化に希望を託した、と理解する。
- (49) Helvétius: De l'Homme, de ses Facultés intellectuelles et de son Éducation, Section 10, Chapitre 10. (Oeuvres complètes, Tome 12, p. 133.)
- (50) Diderot: Réfutation suivie de l'Ouvrage d'Helvétius intitulé l'Homme. (Oeuvres complètes, par Assézat, Paris, 1875, pp. 368~370.)
- (51) しかしながら、マルクスが「フョイエルバッハに関するテーゼ」において指摘した、従来の唯物論の欠陥、すなわち環境の変更と人間の変革との循環論を、エルヴェシウスもまた克服しえなかった。Marx: Thesen über Feuerbach. (Werke, Band 3, pp. 5~6.)
- (52) Helvétius: De l'Homme, Section 10, Chapitre 7. (Oeuvres complètes, Tome 12, pp. 117~120.)
- (53) Bossuet: Discours sur l'Histoire universelle, Partie 3, Chapitre 8. (Oeuvres complètes, par Lachot, Paris, 1862, Vol. 24, pp. 653-654.)
- (54) コンドルセおよびイデオロジストの思想の形成において、認識論についてはコンディヤックからの、社会理論についてはエルヴェシウスからの影響が強い。桑原武夫編「フランス革命の研究」岩波書店、一九五九年、第五章「哲学思想」を参照のこと。
- (55) Condorcet: Esquisse d'une Tableaux historique des Progrès de l'Esprit humaine. (Oeuvres, par O'Connor et Arago, Paris, 1847, Tome 6, p. 13.)
- (56) こうしたコンドルセの進歩史観は、一九世紀の社会主義者サン・シモンによって高く評価され、彼が構想した「人間の科学」のなかに摂取される。Saint-Simon, Mémoire sur la Science de l'Homme. (Oeuvres, par Dentu, Paris, 1876, Vol. 11, p. 10.) なお、これとは対照的に、マルサスの「人口論」がオーエンとコンドルセの思想を激しく非難していることも面白い。
- (57) Condorcet: Esquisse d'un Tableau historique. (Oeuvres, pp. 237-238.)
- (58) 「コンドルセの」公教育論では、「すべてのものの幸福」を確保し、「自然から受けてきた才能を十分に発達させること」、そしてこのことによって、「市民の間に真の平等を確立すること」がその第一目的とされる。ここではまた教育は人権の一部であり、同時に人権の平等を現実的に保障する手段という二重の意味をもつとされた。堀尾輝久著「現代教育の思想と構造」、岩波書

店、一九七一年、二〇九―二一〇頁。

(59) Condorcet: Sur l'Instruction publique, Troisième Mémoire. (Oeuvres, Tome 7, pp. 326-327.)